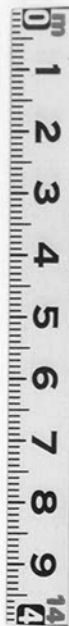


詩南車

第二十七輯 ● ●

磐城
詩南社

昭和七年七月十六日納本
昭和七年七月二十日發行



詩 南 車 第二十七輯 目次

夏の霧(俳句) 渡邊何鳴

短

歌

詩

高久晩霞 佐々木 美崎一 宮田青波 山野邊 白木英尾

赤井嶽男 熊谷金見 大田友成 石川平松 山下一賀 野村多幸 長瀬真幸 大村秋夫 三村哲一 外十人

双葉清 美澤光 丹野草笛 片寄歌二

田部彰 唐木登志 澤美枝 外六人

展覧台 目・耳・口 窓 平のバットガール 島田春夫先生へ 名所舊蹟案内

□編集後記 □消息

夏の霧

渡邊何鳴

月にかざす扇眞白や踊の子
草合歡に觸れて踊の袂かな
牡丹の花笠ゆるゝ踊かな
擬寶珠や霧の觸れ行く卓の上
夏霧や花眞白なるみやまぐさ
夏霧に宵山かけの灯かな
山草の花をしとねのキャンブかな
山上の雲たゝなはる麦の秋
河骨の蕾うち合ふ風波かな
水中花卓上の風ほしいまゝ

詩 南 車

第二十七輯

鶺鴒

鶺鴒

高

久

晚

霞

かしましく雀等唄ふ我庭を鶺鴒二つ今日も訪ひ鳴く
小止みなく尾を首を振りせきはいは悶ふる如く焦り囁る
迷ひ出でて敵に斃れしかせきはいの雛の亡骸は未だ温かし
今しその子を失へる鶺鴒か鳴きのはげしくか往きかく行く
胃を疾みて長くを癒えずたかぶれる神経に夜毎眠り安からず
あかこきのまだ四時さふに庭樹々の雀一せいに鳴きてかしまし
早く寝ねて寝あきし朝の庭雀に起さるゝわが日ぐせとなりぬ
なりはひの砂取りを親等休みけむ子等その舟に遊びほゝけぬ
松の唄うしほの調べ聞きにつゝ磯の小岩に友と語りし
繕らふと搥打つ水夫等勇ましきに近づき見らく淋し朽ち舟
妻子等の寢息安けし荒海の沖の主人を愁へすかあらむ
日ねもすの暑さに喘ぎ來しわれを慰むるかに庭の夕風
夕暮のさ庭に耳をそば立てゝ木うれにそゝぐ雨の音きく
すり硝子折々青く映えにつゝ無花果の葉の觸るゝ音する
雨戸くる音にも怯ぢず庭雀近き木末に囀づり止まず
窓に見る樹々すさまじき音の風に追はるゝ雲の流れ止まずも

渚

佐

々

木

顯

看護婦の渚を歩み松原に消え行くが見ゆはまなすの花
行きづりの人にたづねしはまなすを耳新たなりはまばらといふ
大海は紺碧にして静かなる沖遠く白帆一つ走れり
大曳の漁師出でしと見やるまに沖に進みて早やほのかなり
親牛の垂れたる乳房振れる尾に子牛たどたどしたひ行くなり
たそがれに歸り來ればよきいろにやけしとひとのいひて迎ふる
狂人のわが店に來てつちつまの合はぬはなしに高々と笑ふ
かたきの子にもわづらはしたくなきものと子の薬買ひつゝ母のかこつも

海の祭り

美

崎

一

郎

おそ春の海の祭りの賑ひに心ひかれて吾も出でにけり
門毎に飾る藤波山躑躅化粧へる娘らの面ぶせにして
きほひ立ち神輿をかつぐ足並はむら立ち亂れ揺れしごろなり

汗あへて神輿をかつぐ若人の顔は埃に黒ずみて見ゆ
 渚べを神輿の馳すれば並足は飛沫の中にぼかされにけり
 海の面に頭は群れて波の秀は神輿の屋根をたわみ越えたり
 人垣のあひに暫しは現なく海の深みの神輿見にけり
 菊の芽の根分けをなすと降り立ちぬ地靄かそけき今日の畑土
 根分けして菊を植うれば柔かき新芽の匂ひ手にしうつれり
 空晴るゝ四月の海はたまさかに遠足に來る子らもあるなり
 海へ來し遠足の子らをなつかしみ物を問ひたり砂に坐りて
 遠足の子らが歸りし磯邊には食殻散りて波はゆれ居り
 裏庭の柿の若葉の照りかへす朝日を見れば春たけにけり
 一夜さを降りにし雨の今朝晴れて菊の若葉は張りさやかなり
 ひと時は烈しかりしかよべの雨菊の下葉は砂にまみれぬ
 寝つゝ聞く五月蛙の亂れ鳴き高まりゆくは雨や霽れにし
 五月夜を響かひ亂れ鳴く蛙近きもきこゆ遠きもきこゆ
 迷ひ來て鳴くにやあらむ近々と寝耳に響く五月蛙は
 五月あらし馳せゆく雲に残りつゝたまゆら洩るゝ陽の強さかも

妹

宮 田 青 波

離り住み久しうなりし妹のなほ相逢す嫁がんとする
 七年を逢す住みにし妹の嫁ぐは三日と定まりにけり
 名古屋てふ名のみ覚えし都なり嫁し行く妹を哀と思ふ

木 い ち ぎ

山 野 邊 青 甫

山深く葉かげに熟れし木苺をまさぐる思ひは若きにかへる
 文讀むに心つかれのおぼゆなりけだるき夏の陽のしづむころ
 裏山の群竹のつゆ垂る音す物書き續くるしづかなる夜に
 やはらかき早苗に白つゆ結びをり日暮るゝに早きこの小山田の
 梅雨明けの雷と思ひしに降り出でし雨ながながとつゞくいぶせき
 三つ二つ日照雨の粒數を増しキャベツ畑に音立てにけり

なりはひに兎を雞を豚を飼ふ百姓のこゝろおだやかならず
 米野菜賣りて生活の立たざれば益なきことを百姓はする
 わが家の收支償はずいらたてるか父はこのごろ言多くなれり

崩れゆく存在

白 木 英 尾

なすこともなく、うつうつと生きるいのち、たまたまなく孤独をかんする母と二人ひそやかに生きる、けれども母は段々私を知らなくなつたあまりなへだたりを知つたかなしきで言葉すくなく對座してゐる自分をいつはれいつはれ！強ひられる生活に鑑はれた私なんだ（家族制度）家をまもるといふ勿體らしい口實で因襲に死する子となる男だぶすぶすと炎がもえてゐる、たしかに反逆の炎がもえてゐるのだが——去勢された馬のやうな人間だ、はげしい思想もなく、はげしい愛慾もなくするする、するする崩れゆく存在だ、疲れ果て、いま、世の中を見る（中間階級）あゝ、時代をすべり落つる空虚な人生！果然と自分を意識してゐる

朝の雑木林

うす青くレーンコートをぬらしてゐる雑木林のつゆ明り！
ほたはた木雪の落ちてゐる音！朝、びしよぬれの林道を行く
腐植土の匂ひがぶんぶんするあたり、皐月は紅い花をつけてゐた
ごこにも陰影のない無氣味な明るさ、蹠に蘇苔植物の觸手を感じる
朝の雑木林へ流れこんでくる風、風、風！貰をくわへて佇んでゐる
かたはらには、はつきり白い蔓草の花、愛しき人のかんじように觸れる

智慧は空虚に

餘 燼

田 部

彰

智慧は空虚に宿る
浮動する氣流が
吾々の周圍を

私の心を翻譯されたのが
この詩なら
やたらに書き散らすのは
激情の余燼でせう

歸郷して

唐木登志

時の觀念は——
血潮の増減に依つて
氣分に干満がある

死の領域は
智慧の喪失にある

低迷せる山腰の白雲も
地上に降れば

滋雨であり、霖雨であるのだ

蟻が塔を礎くも
理想の實現か？

展望台

あ・べ・せ

菅之澤開道之碑さいふのがある
小波巖谷山人の撰及び書である。
ハテサテ、菅之澤の開鑿とお伽
噺にどんな因果があつたのか、お
判りの方は手を舉げえ。

山崎興三郎翁の人格を以てした
撰文では、なぜ悪いのだ。縁もゆ
かりもれえ人の道楽なんかで、俺
達の先祖様が汗水流した仕事だ、
ヘン、バカにして貰ひますめえ。

新聞聯盟の懸賞小説以來、吉野
せい子さん、啼かす飛ばす。なん
とかして、一度は天を衝かせてや
りたいもの……。

さるにても混沌三野氏、「鳴アは俺より偉くなるウ」なんて済まして居れまい。この頃の彼の意久地無さ、だらしないさ。暮島は、地下で泣いてゐるさか。

× × ×
 この馬の骨だか分らの奴を、「磐城歌壇」など、借稱して放りこむ。(磐城新聞)
 大先生島田忠夫、また一つ血迷つたな。

× × ×
 一、姓名 草野心平
 二、人相 詩人顔、アナ色
 三、身長 尺タラズ(栄養不良)
 四、音聲 當時「銅鑼」聲ヲ發ス
 右之者目下行方不明ニツキ御捜索方願上候 願出人 誰澤那四

× × ×
 磐女の新妻久満夫氏、苦心の作

が遂に縣の代表民話となる。
 八十、雨情の面々、さすがに眼は狂はなかつた。

× × ×
 どうだい、萬事、そこらのメツキ物とは違ふッ。平教育會、もつて如何となす。

× × ×
 郷土新聞に提言一つ、夕刊は夕刊らしく、讀者の心理をキヤツチして編輯すること。
 先づ、月曜日の社説みたいなの、愚の骨頂だ、止めッちまへ！

× × ×
 「みのり會」さま……
 其の後、いかに、なされました。

× × ×
 黒土會とかの農民文學運動。成るほど、今こそ、田を作るより詩を作る時代乎。

そして長い間俺を冷たい獨房に放り込んでおいたアイツ等は
 反逆兒だ國賊だこ世界へデマを飛ばし俺に強制歸國を命じた
 おゝ！

アイツ等こそ勞働を盗む者の手先となつて
 プロレタリアの革命的昂揚を壓迫する奴だ

疲勞した体を汽車に揺られてやつと辿りついた故郷！
 田には實つた稻穂が重く頭を垂れ、藁葺の屋根から白い煙がゆらいでゐた

然し、あゝ、
 資本主義社會のもつ底知れぬ重壓はこゝにも巨大な魔手を擴げ

純粹無垢な俺達の仲間をミイラの様に乾し殺そうとして居る
 毎年の收穫を見て太い溜息を洩らすであらう故郷の人々

活をしてゐるのらくら地主
 俺達の勞働をヌスンで生てゐる奴等仲間よ
 俺達はアイツ等をさしていゝのか！
 鹽辛い味噌汁を吸ひ
 生味噌をなめ乍ら血み泥に働く百姓、これが人間の眞の生活だらうか！

俺は再二判事の言葉を想ひ出す——
 勞働を盗みそれで豪傑な生活をせよ
 資本家地主の不正を叫び闘て來た俺はおゝ百姓達よ
 國賊だらうか反逆兒だらうか！
 俺は今鐵を握つて居る

山葡萄・なつかしき風景

澤 美 枝

空は澄んで碧い

働けば働く程生活が切りつめられて行くであらう故郷の仲間——
 知らないのだ！
 誰のために血みどろな一年を送つて行くのかを！

(安藤一ノミヤキ) 終

農村には失業者は居ませんと白々しくもほざいた村長よ
 この方程式を何とみるのだ
 仲間の家計簿をみせつけてやらうか

仲間達よ、よく目を開いてみよう
 仲間達には娘を賣りそれで米を買はなければならぬ者もあるのに
 ひこり地主が豚の様に肥えて行く
 しかも働かずに……

なんと云ふ矛盾だ！
 俺達はこれを見逃がせようか！
 俺達の一年の血みどろな結晶を
 暴利な小作米徴収に依つて贅澤な生

梅雨晴の野はあまりにも緑すぎる
 碧い野原で唯一人
 廣い空をすかしみる
 細い一本の橋
 かたむいた家
 どこまでもつゞいてるたんぼ道
 きよい水の流れ

山
 それは故郷の風景
 あの頃そうだった
 二人でよくたべた 山ぶどう
 なつかしい味忘れられない味
 なつかしいかの人
 もう永久に逢ぬかの人
 忘れられない
 山ぶどうの味とかの人
 私は 私は
 碧空の中にみ出した
 なつかしき風景と思出を
 空の中を泳ぎ行く雲に流してやつた

吾子 赤井 嶺 男

宿題の多きに吾子は夕餉食まで小暗き縁に鉛筆を削る
 モルモットの餌草をこらむと霧中を吾子はいとはず出て行きけり
 まづ太く眼鏡を描きぬ晩酌の父を寫すと戯むる、吾子
 今朝もまた三尺ばかり蚊帳を出でし吾子の寝顔を笑みつゝ吾が見る
 朝なさら後追ひて泣く吾が季子のわれにし嬉しさ愛しさ極まる
 今朝も亦氣弱き吾はためらひつゝ子があと追ふに歸らなく思ひし
 いさゝかも地方色無きストリイの投稿に今朝も悩まされけり
 『校正を嚴重に』など書かひものこと書いてある寄稿來りぬ

つゆぞら 熊谷 企 見 子

梅雨空のくらく動けり外に立てば頬につめたく霧雨かゝる
 堪えがたき憂さをはらさんすべもなくこもらふ晝を花生けにけり
 獨り居て滅入るこゝろをはげましつ出で來し街の軒並くらし
 思ふこと何もなし得ず暮るゝ日は鐘の音さへもはらたしけれ
 青葉かけ雜草つめば雨あとの土のしめりのこゝちよきなり

五月雨のうるほひしげき庭先にあやめなでしこ咲きそろひたり
 うちつゞき降る五月雨に庭の草つむまもあへずはひはびこれり
 矢車の鯉ものぼらず五月空むなく雨にけふも暮れにし

妻 泉 田 友 成

殺風景なこの八疊に新らしき箆筒を据へて明るかりけり
 窓ざわに机をかへて花置けりかたへの妻のほゝ笑みなるも
 障子打つたゝきの音にまちりつゝ妻はがらかに笑ふ今朝かも
 ほゝ笑みて我れを迎ふる妻の頬に疲れの色のしるさこの夕
 思ひ出の道は青葉に萌え立てり花をかゝいて妻と歸るも
 氣まづきに共に黙してうづむけば怒りし事のさゝやかなるも
 眼閉ちて折々動く妻の額に熱や昇ると手をあてゝ見る
 妻病みて語らう事の少なければ淋しくなりてひとり寝ねけり

春の旅 大 平 松 夫

移りのく窓の景色の明るけれ鳴ならむか沖の飛び來る

目

□ 蒸暑い夜の夏、街を歩くこゝ「ゆかた」「涼み台」「うちわ」のトリオが床しい涼味を誘ふ。

□ ウェンドーにもたれる若い女と男の姿、氷をかく氷屋の軽快なリズム。夏の樂しみは、夜から……

□ 鶴屋のシヨオ・ウェンドーは氣が利いてゐて、清新で他の店と比べて何時も、抜群の出来である。

□ 僕等には余り縁遠いものばかりだが、何時も一寸とした展覽會並に振つて、通る度に立止つて楽しんで來る。

□ それにしてもマルトモのウェンドーはごうだ、今少し統制がされないものか、イヤにコテ／＼と品物ばかりが、並べてあつて、余り感心出來ない。暑さに向へば尙更の事だ、オヤザの一考を促す。

□ 大谷のは確かに奇麗である。然し、それは唯々奇麗だけであつてネオンサインまがひの電飾を除いては、藝術的價值はゼロである。

耳

□ 先日來た、ロシヤのスナゴフスキンのバラライカは、珍らしく古典的で太變よかつた。明快な彼のボーイングと、驚くべき色彩と力強さに輝く美しい音色は多大な印象を與へた。伴奏のギターは今少し洗練された力強さがあつてもよいかと思つた。

□ ギターで思ひ出したが、セコピアのギターは一番いい、これからの夏の夜には、なくてはならないものだ。彼のレフ・アインされたメロデーが、快い夢を僕等の耳に送り入れる。

□ 平にも洋曲レコードをドツササ持つてゐて、紅茶一杯で二三時間も落着いて聞かれる様な喫茶店が欲しいものだ、多くは云はないけれど、一軒もないのも淋しい様な氣がする。

□ 磐女の二十周年記念で山田耕作を招んで、音楽會を開いた。當日要があつて、招待券を買つたキリ

天を、る無電の鐵塔あふぎつゝそこに住まへる友の思はゆ
默々と巷路よぎる兵隊の額にみゆる疲れかなしも

小夜更けのページメントに覺音立てて一群の兵近づき來たる
多賀城の畔りに住むてふ君の歌の絶えてぞ久しすこやかなりや
漕ぎいでて返見すれば丘の上のパークホテルが木間になほ見ゆ
いつのまに遠ざかりけむ牡蠣とりの舟のろの音はそく響くも
岩壁にひたひた寄する青潮のみまなく崩るゝ音の寂しる
ふりかへり見れば寂しも沖つべに黒き鳥影かきなりて見ゆ

野 茨 石 川 梅 子

野茨の花咲きにほふはさま道はるばるこさく山鳩のこゑ
吾がかへり待ちつゝあらむ子を思ひて心せかるゝ野茨の道
夕暮れて川面にのこる水明りこの道吾はひとりなりけり
夕霧の深くこめたる川原に疲れてたゆき足やすめけり
足とめて心あははし月見草の白き花をば吾が見たりけり

いちご熟れる頃 山下 多賀子

街の灯に遠離り來てはるばるし硝子濡れる時計を讀むも

水色の草花書ける瀬戸皿の葎美しく水溜めにけり
迅く走る白き雲見ゆ梅雨晴の町の空なる飛行機轟ろけり
み佛の眉に日の照り光りつゝこの寂けさをよろしと思ふ
春の日を歌作りごち集ひよりて心おきなく語るうれしさ
書籍讀みて飽かする日の暮れにけりのごけてゐる心嬉しも

草 む し り 野 村 幸 子

しばらくは友のくるてふたよりなり庭の雑草を吾がむしりゐる
夕暮れて吾をよぶ姉に應へつゝいまひと息と草取りいそぐ
けさ見れば昨日掃きおきし雑草に青々として雨ふりそぐ
街々は今寢静まれり遠つ田の蛙の鳴くをかいこさく
遠つ田にしきなく蛙かいこさく夜更けの街に吾れ聞きてゐる
まことなき友を歎かず獨り居に心しづめて針はこびゐる
ひいやりとくる水の感觸にひたりながら洗面する朝のよろこび！
諦めきつた筈のこの悲しみ、はとりと洗面器に落ちた涙をみる

廢 坑 の 畫 長 瀬 貞 夫

陽焼ける粉炭の山に蟻の這ひて廢坑の眞畫靜かなるかも

(12)

行かなかつたが、岩井敬のサエコ
など大變評判良かったらしい。め
つたに呼ぶ事が出来ないものだから、
一部の人達に獨占せず一般的
にも公開して欲しいものだ。

□

□平でコーヒーのほんごにうまい
店は一軒もない。

□カフェーではコンパルが上品で
一番いい、勿論カフェー化された
喫茶店であるが、女給など、上品
で、氣が利いて、店內が明るくて
感じがいい、これ位のものを今二三
軒他にあつてもいいだらう。

□ボックスでは、黒猫が一番いい
……あれで、もう少し店內が明る
くなれば、これから夏もいい。

□男ばかりで、フアミリアルでい
いのはサロンである。フランス料
理で賣出しているが、本場の巴里
で喰つたことのない僕等には、わ
かりこない。だが、時々うまいの
を喰べさせるそうである。洋酒
など揃つてゐる様で、コ、のサロ

キーはうまい。けれど、サロンも
今は駄目になつて、昔日の面影が
ない。

□安くて、うまいものは、マルト
モ食堂がいい、コックに上手なの
が居るせいもあるだらうが、洋食
は平が一番いい、それに食器の清
潔なことは随一だ。

□平でカフェーの營業時間は十二
時迄だそうだが、他では三時頃ま
でやつてゐる。文明は、夜の生活
を延長させるさうが平だけは縮
小させる。

□水豆は梅月のが一番うまい、フ
ルーツボンは、今度出來た三益
がいい。(POP)

小 集 の 記
六月の小集は五日午後二時から
マルトモの二階で開いた。來會者
は左の七名で甚だ少なかつたが之
は小集といふ初めての會合がよく
呑込めなかつた爲めらしい。

美崎一郎 宮田青波 片寄歌二

板園をせる坑口に近づけば地下三百尺の息を感じり
 ばた投げ場の傾斜に暑き真日の照り蔭はくけてるたりけるかも
 齒朶の葉のしめり静もる杉下道朝の陽ざしはいまだとくかず
 選炭場休み日らしも選炭婦窓にむらがり電車見てゐる
 雨風は烈しくなれり傘の柄を腹におしあて、ひたむき急ぐ
 雨風は烈しくなれり水の上を光り持ちつゝ雨玉走る
 積まれある鯉の尾揺れ光らせてこの街道をトラツク走る

獨り居大竹秋平

吹きよする青田の風にまむかひて夕餉食すなり獨り居われは
 朝まだき起てたゝめる蚊帳の鎖が相打つ音の何かさびしき
 つゆ晴の朝早々こわが友の障子を開けて髪すきており
 大空の雲の往き來を氣遣ひつゝ休みの朝を濯ぎ物干す

うつろ心三村哲朗

生活も愛も希望も失はれた、あゝ、このごろのうつろなる心
 何物でも充されないうつろな心、たゞばんやりと空を見てゐる
 こんな日がいつまで続くのか、平凡でやりきれない人生でないか

秋野平一

風邪病みて夜具引きかづきうつ
 うつと夏の一日を蒸されてあり
 夜降ちて我の病を氣づかひつつ
 來りし友の情に泣かゆ
 あれを思ひこれを思つつ病み臥
 やる我の臥所のいや亂れたる
 今宵ふとも夜を仰ぎて静夜に星
 ははつはつと見ゆるは淋しき

澤美枝

力こめて毬なげ上ぐる幼な兒の
 眼に五月空青くうつれり
 この朝や卓上の薔薇の大き揺れ
 匂ひやや強く部屋にこもれる
 呆心した私を嘲けるやうなへう
 へうと吹く風を感じる

窪田志朗

この朝け山下りくれば馬鈴薯の花
 花咲く畠ひらけ明るし
 狭霧はれて畠明るし馬鈴薯の花

の香りの胸にしみ入る

あまた咲くま白き花の親しけれ
 しばし佇みたのしみにけり
 ひろびろこの岡の上に霧みち
 てすがしき朝に雲雀の鳴くも
 折々の友の便りにほほゑみて庭
 の芝生に目をおきにけり
 見はるかす遠近山の濃緑にしみ
 じみ生くる力を観つつ

磯山六花

この道の小松林のひとところ椿
 明るく咲き亂れたり
 こころよく今日一日の暮れはて
 て鉄の土落す春の黄昏
 歌に句に親しみそめていささか
 は悩む心もうすらぎにけり

磐城新三郎

履歷書を吾に頼めるその人の頬
 のやつれは寂しく見えぬ
 落盤で死にし事なご語りつつ

吉田 甫 三村哲郎 湯淺照明
 白木英尾

小集は顔合せなど、いふ意味な
 いものでは無く、作品に對する批
 評研究など實際の眞面目な論評が
 自由に取交され、黙つて聞いてゐ
 ても可なり面白くて得るところが
 多い。今度から多勢出て貰ひたい

ビクニツクの記

△新舞子へ 詩南社の新舞子への
 ビクニツクは五月十五日行つた。
 参加者一十一名。朝十時自動車で
 出發、午後五時歸途、終日天氣よ
 く愉快なビクニツクであつた。當
 日の参加者は 白木 吉田 美澤
 湯淺 片寄 水町、他十五名
 △豊間へ 六月十九日佐々木、宮
 田、片寄、水町他五名、豊間の美
 崎氏宅を訪問。美崎氏の案内で、
 「はまなす」の群落、其の他を見
 學、カメラに撮り、同氏宅で午餐
 の馳走になり、歸り沼の内に寄つ
 て五時半迎ひの自動車で歸宅した

ルハシ負ふて坑内に入る

湯淺照明

川越えて舟のくるらし夕霧には
 のぼの浮ぶ灯し火のあり
 風邪を病み銚子の濱にゆきし姉
 しばし便りの無きが淋しき

高木政子

君戀ふる吾が胸ぬちのたよりな
 さ物思ふこと多きこのごろ

櫻川清峯

山の灯がうつる田の面の美しさ
 蛙は夏の夜を鳴きしきる

金賀敏日子

麥やぎる野火の烟のたなびきて
 おちこちの田に蛙鳴くなり

佐藤行雄

初夏の風を肌に感じつつしばし
 見てをり鯉職りかな

松原弘

幼なきよりのけられ者の友なり
 しが異郷に逢へば頼もしき哉

偽られた男

湯 淺 照 明

ブラブラ裏返る頭をかかいでじつと街の騒音をきく……
荒み切つた心のごす黒い血と血の闘争ひ
貴様は余りに従順過ぎた
貴様は余りに正直だつた
貴様は余に信頼を仕まつたのだ
見ろ！吐き出された血潮の醜状を
まるまると肥ったあいつの嘲笑……
それに貴様の神経は刻々すりへらされて
もう骨と皮ばかりで笑ふ事も出来まい……
偽りの泥水にうめき笑ふ氣狂のその様な……
投げ捨てられた古猫のその様な……
食ふ事すら忘れて仕末つた貴様

學生をかきたいんですが……

今日も朝から灰色の憂鬱

貧しい百姓の僕は

もう着るものがないんです

朋

下坂東 五郎

朋よ山の頂へんで銀を振り振り
唱つてゐる俺が判らないのか
俺は 松の根株に一ふくして
君等のうごめく 生活を
見つけてゐるのだ
朋よ俺を忘れてはいけない
松の根株に ぐつかり座つて
俺のでつかい頭が見えないのか
俺の瞳もダンダン君等の
生活がみえなくなつてゐるのだ
朋よ山上の頂へんで
孤り唱ひ續ける
僕のコーラスに

の命だ

荒み切つた貴様のぬけがらを踏潰して

魂と血をしばらくとつたあいつに

貴様の最後の挑戦だ！

畜生！やつちまへ！

あいつの偽りを満中に叩き込んでやれ！

そして貴様は花の前に高らかに笑ふんだ

労働者の唄へる

三村 哲 朗

ゴウ／＼／

機械のあのモーターのものの凄いうなりは

友よ！

俺れ達の生活の

コーラスの伴奏なんだ

有閑人の聞く

華やかなジャズのメロディーは

朋よ熱烈な拍手を送り給へ

神聖なる旭陽

佐藤 行 雄

おゝ見つめる彼の雄大な日の出を

ぼん／＼と一輪水平線の彼方に

昇る太陽平和をのせて

あらゆる者に自由をあたへ

荒くる波の静まり行き

高き希望燃ゆる者炎熱の下で働く時

凡そ体は凡そかなへは雷の如く光

西の空が赤き平和に包まれた時

それは一輪の太陽が安樂夕を

平和の家庭に残して沈んだ時に

又来る朝は凡そ人の希望をのせて

平和の天地を輝かすのだ！

希め太陽——

神聖なる日の出を

街頭風景

丹 野 晴 夫

初夏！

—(16)—

ないけれど

モーターのうなりと打下す

ハンマーの鐵板の亂打の響は

もつと、もつと

力強い喧騒のチャズなんだ

おお俺達の財産は此の腕なんだ

友よ、

物質には倦怠する程恵まれた

ブル階級の彼等の持つ財産より

もつと／＼尊い財産なんだよ

季節畫

桑 原 勝 雄

森の色は

とつとに青葉にぬつてしまつた

んですが

草深い道も

とつとに出来たんですが

どうしても空の色がぬれないんです

日傘をさしたお嬢さんと

高いホー・崗の下駄をはいた

新緑の初夏！

バラソル、フェルトの音

萌黄の野を汽車は

眞一文字に走る。

初夏は！野山を出でて

街頭に店先に溢溢れて来た。

折からびく／＼チンドン屋の音

あゝ——何んと云ふ賑かさだ

憂鬱な気分はどこかへ

すつとんでしまつた。

美装せる女が通る

バラソルがゆらぐ

背廣服の燕がおよぐ……

彼女等は嬉しそうだ

嬉しさを包み切れず

喜々として大道を濶歩する

瞬間……

街路樹のワクラ葉が

ヒラ／＼と舞ひ落ちた

纏てチンドン屋、ジャズの響を

残して町角に消えた。

眞晝の街頭初夏の風景

—(17)—

この頃

双葉清

お前が来てから
このうちは癡人の安宿のやうになつてしまつた
見ろ

ゆうべ夢魔のやうにそつとしのびより
夢魔のやうに去つて行つた男があるではないか
その男は連命のやうな大きな足跡を
どす黒くのこして去つたではないか

それからもち 沼底のやうな暗がりの中に
しよんぼりと立つてゐるお前ではないか

お前が來ない前

あんなにも賑かであつたこの家

女も居たし 子供も居て

春になれば花が咲き

秋が來れば木の實がうれてゐたこの家

お前が來てからは
いつも墓場のやうにひっそりと
夕ぐれの中に立つてゐるではないか
みんな野良で働いてゐるとき
手ぶところをしてぼんやり眺めてゐるお前は
まるで白痴のやうだし
夕暮——
ふり亂した狂女の髪のやうなグミの木の下にた
づむで
ちつと灯もともらない廢屋をみてるお前は
亡者のやうに影が薄いではないか

あゝ、あんなにも熾烈であつた
お前の氣魄はどこへいつてしまつたのだ。

おれ達は正しいんだ

美澤光夫

俺達の要求はそんなに無理なんだらうか。
息子の義務教育をやめさせ

娘を賣り

それでも借金と税金で苦しいんだ。

この苦しみの

嘆願を！ 要求を！

俺達貧乏人が團結してやる事が何故いけないん
だ！

俺達の先輩は

日清に日露に世界大戦に

俺達の生命と俺達の生活とを守る爲に

悪しみの砲火の中に血ひふきをあげ乍ら

後より生れ出で来る俺達の安泰を夢み乍ら

輝ける屍を戦線の廣野にさらしたんだ！

然るに俺達にむくいた返禮はごうだ

失業と餓死と破産とではないか

しかも俺達の爲に先頭に起つた兄弟達を
片端から奪つてたんだ
今こそ俺達は確然と言ふ事が出来るんだ！
俺達を守るものは
俺達自身なんだと云ふ事を！
俺達はこの歴史的優位性の中
俺達の組織を守る爲に
適階級の前に逆襲を決意せねばならぬと云ふ事
を！

兄弟！

俺達は正しいんだ！

俺達は必ず勝つのだ

その時に於てのみ血にそまつた

勝利の旗

プロレタリアの旗はなびくのだ！

山 二篇

丹 野 草 笛

山に向ふと
唯わけもなく涙ぐまれてしまふ。

山は聖者である。
慈父である。

しみじみ仰げば
ほら！ わたしのむねに

かつて忘れられた童心が
ものかなしくもよみがへり来るでないか？

あゝ 唯々
ひれふして泣きたくなつて来る。

が 時にこつて

山はうらわかい乙女である。
純情の胎である。

晝が去り 夜がめぐり

幾つとなく年を経た

しかも うらわかい處女である。
未だ汚されたことのない

うるはしい奥地をわけ入り 入り
山のひみつをさぐるは止そう！

それは あまりにも怖ろしい胃潰であるから。

×

山なしに

ふるさは考へられない。

追憶の繪巻が

すべて山の色でつゞられてあるので——。

山のふところに抱かれて眠る

幼な日の夢はなごやかだった。

山の感情が

同時にわたし自身のこゝろであつた。

あゝ 山と共に生き

山と共に思ついた

そのかみよ！ 幼なこゝろよ！

今はかへすすべもなく。

遠い遠い思ひ出の斷片を

つぎあはせ つぎあはせ……

いま！ あゝ

山なしに

ふるさは思ひ出せない——。

顛落するもの

片 寄 歌 二

高い屋上に洋服を着た男たちは

何處を風が吹くかといふやうな顔をしてゐた

眼下には自動車や自轉車がひっきりなし通つて

その中には人が一杯あふれてゐた

そこつくは幾萬噸の材木を運び

前の廣場は何十丈と掘り下げられ

えんちんの力で地下からはごし／＼と汚水がは

き出されてゐる

がん／＼と強甚なはんまあは鐵板をひつばたき
眞夏の光を受けた彼等はぐしよ濡れになつて働

いてゐる。

おゝ幾千丈の地下から 上へ！上へ！へ

と積み上げられてゆく忍苦の力！

それは彼等の素晴らしいプロレタリアの結晶だ

おゝ眞夏！つまらない口實にかくれて都會から

逃げて行く奴は誰れだ！

やつと暑さに退れて來た屋上だが

俺の脳髓はぐら／＼と屋上から顛落してゐた

★(車)★
★(窓)★

美崎一郎

此の春以来、数回知人の来訪を受けたが、その度毎によく近くの海岸から鹽屋崎燈臺の方へさ歩を伸ばした。泉のやうに夜、眼を光もすだけだった燈臺も最近耳と口とが出来て、海霧で眼が利かなくなるそれが盛んに活動を始め今日七月七日・海霧が昨夜からひどい。三十秒づつ、断續する霧笛が今も咆哮してゐる。無線も沖通船からの通信に耳を待てることだらう。所で困るのは見物に来る人々。事務多忙といふので殆んど見せられない。この燈臺、中程を黒く塗つてゐるのは美を害する、と甚だしい。全部真白に出来ないものかと思ふ。

山野邊青甫

旅で、冬の二月も終る一日、横

平のバットガール

白木英尾

バットガール・ユミ子は、今年櫻ヶ丘の學問所を出たばかり。夜の八時過ぎ、いきなり飛びこんで来て、ベタンと坐つて、ボク、泣いちはふかなあ、と私の兩膝を抑へて、ぐりぐりやりながら言つたものである。……だつて、今、接吻しちやつたんだもの、いくら女同士だつて、ねえ、カンキキするわ。……言ふのである。つまり、仲まのA子と別れしなに二人は、その、感激したさいふのだ。それは、が、依然、私の膝のぐりぐりが困るので、私は、つい、止せ！と叱つてしまつた。ユミは、私の可愛い妹分なのだ。夜さなく書さなく、やくざな兄貴さんこへ飛びこんで来て、小ムツがしいおれんを言ふ。そして、私の困つた顔を見ては面白がつて騒ぐ。ユミは全く苦手が手だ。おそろしくインテリで

感情家で、あまのじやくで、その上困つたことには、頗る大膽で、亦、頗る臆病なのである。戀人が一人あつた。四倉の濱つ子よ、がうちりしてゐるわ、と、ユミ。そのユミが、こんど断然、彼を放棄しつちやつた。……お兄いの、認識不足でなかつたわ。ウフン、ウフン。……彼女が私の前であつた。成るほど、私は、その戀人なる少年を一瞥した際、ちと粗暴ぢやないのかと注意したことを思出し、でも、被害はかすり傷だけ、それ、それ、こつちの落ち度だから仕方ないわ、と、哀れなユミは、おそろしく朗らかなんだ。……愉快なことは、……だいたい、女は、生れながら、に、彼女が實にこうなんだ。……雨の日、ユミはいつものA子と二人でやつて来た。これから

カフエーへ連れて行け、そのお布れてゐる。私はよくよくの事でない限りカフエーなんかへ行かない旨を告げた。と、お兄いは固いの柔いのと、こも五月、十間札を懐ろに出かける。……こんなやんちや共を連れて、晝日中カフエーもおぞましく、私達に或るレストランの卓子を囲んだ。……レモナードだの、オレンジジュードだの、それからアイスクリーの代りにサンデーを食べる彼女らである。そして、絶えず饒舌と喧嘩の渦である。……お兄い、ナニよヘンな顔してんの？ サ、アリツグでも仕よう。勿論、賭けんのよ。……ユミはトランプを出してバラバラと切始めた。これは、おそろしく愉快なことだ。彼女は、レストランを、きわめてホームリイなものと思へてゐる。……でも、こんなフランス趣味は誰の感化だらうか。……で、ユミは、アリツグがカボネの同窓會の日、自動車をおこるさいふ悲しい敗け方である。そ

の上、お兄い、晚餐會もこいで、と、言ふのである。……ユミは、金の經濟學をあまり知らない。ユミは、消費の哲學を考へてゐる。そして、いつもはつらつと振舞つてゐる。これは、彼女のバツションである。ユミよ、これを讀んだつて悪く思ふな。ユミばかりバットガールでないんだから……。

島田春夫先生へ

浦島次郎

先生と言つたつて何もお前さん相手にして物を言はふつていふんぢやないから、早合點して字頂天にならずとも宜しい。……只、先生の書いた「詩南車同人のまゝ事」といふ誠に藝術の香の高き文章、あれを讀んでゐるうち、その雅拙さに思はすつたりさせられて、今、華宵の園を閑然と訪つてゐる。先生もあれを書いたお蔭で、聲城新聞では片寄歌二からボク／＼叩かれたい、學句には譯の分つた様な分らない様な美澤何とかが留め坊主にもいみじき拂子でやられた仕末。お前さん、あの時は

大分い、音がしたぜ。太鼓でも木魚でも、中味の空っぽなもの叩くぞ、あ、い、音がするもんな。ユミは、音がつてお前の言ふことにならぬ、短歌は次の時、代獲得の道具にならぬいさうで、ハ、何となくお前の毒さ。先生のあすこへんを讀んでゐるさ、狂女間に戯れて鬼哭狼嗥、お前さん、よく正氣で來られたナ。尤も、古今稀れなる歌詠みの大先生を兄貴に持つお前だから、オホ、短歌なんて、チャチなもんサ、れえ。

お前のやうなボンケ成上りと、ヤレ詩は、ヤレ歌は、ヤレ藝術は、なんて眞面目臭つてお附き合したばツかりに、大親分三野混沌や中野勇雄までが飛んた泥をへられて、カフエーあたりの不良少女にも甜められてしまつたとは、アナオぞまじや。……お前が消えて無くなるまでは、あの親分だつてノメ／＼出て來られないといふ。親分がこんな考へを出すのも知命となつたせいで、齡はよくしたもんだ、最近一つ口を動かさなくなつた。……あ、ナンマンダ、何

裸體をさらすのは、原始人の生活である。暑くなるさ、人間は野暮になるらしい。……海水浴なんていふ美名に隠れてグエレメの惡の華はこゝから咲くのではない。……暑い思ひして外出するより、家の中に引つくる返つて晝寝した方が、趣きあつていい。……世の中に、涼しい情熱を持つた女は居ないかしら。夏は、萬事涼しいOK。

片寄歌二

詩南車の語源に就いて、よく問はれる。今更、説明でもあるまいが、昔、支那を始めて統一した黄

王と呼ぶ皇帝が、漢民族と苗族の戦に、常に、濃霧の爲め、不利を蒙つてゐる味方の軍の爲め、指南車と云ふ羅針盤を發明し、一つの方向を與へたと云ふ。

指と詩の語音が相通する故、詩南車と改め、詩南車が藝術的運動の一つのガイダンスを與へると云ふ意味に解釋して附に過ぎない。

白木英尾

平には、十三日會さか、土曜會さか、と一つの社交團體がある。然し、私は未だ若い人達ばかりの集りを聞かない。町の若い人達ばかりで、何か一つ社交機關が欲しいものだと思ふ。

これから夏、小名濱や四倉へ名の知られた人が可なり避暑に來る私の知つてゐる丈でも、大塚金之助、橋田民藏、文士の諏訪三郎などの諸氏がある。こんな人々の講演會を町で開いたらよいだらうとつくづく思ふ。

◎名所舊蹟案内

S・T・B

- ▲第一塚 永山の麓に在る。古代の金銀財寶が埋つてゐる。考古學者の研究も實績が擧げないので發掘を中止した。
- ▲久満ノ宮 平町櫻ヶ丘に鎮座する神様。毎日、女學生の參詣で境内は群れをなしてゐる。
- ▲嶽男沼 往時は満々と水が湛へ魚類もゐたが、今では沼形だけ遺つてゐる。一名ノンキな父さんといふ大亀が棲息する。
- ▲何鳴寺 水明式の美麗な堂宇で地方の名刹。四邊は閑寂として年中ホトギスが鳴く。たけノ湯 萩原に在る。館主は縣會議員。沸かして入る。丁度よくあつた。
- ▲宮田川 茫洋乎として流れるが、時々濁水するので流域を困らす。支流に小谷川があるが今は枯水しつちまつた。
- ▲滋 岳 一九三二年一月、詩南社に突如隆起して盛んに火を噴いたが、同六月、ぱッたり活動を止めた。あそこは火山で要をなすまい。
- ▲黒江湖 ロンヤのアカイ湖に似て鹽分を含む。情しい農田舎では余り知られてゐない。吉田通り 昔は二階から掛いたが、現在はカフェー街となつた。街の並木も、手入れしない、枯れなけりやい、が……。
- ▲美崎海岸 及び一郎湯附近の清澄さは、はまなすの花で傾に知らる。これからは遊ぶ人が多くなるだらう。
- ▲青市園 附近一帯は蔬菜園の樹で知らる。人通りは少い。高久山 山高く樹もよく茂つて地方の名山。山上に木兎荘が在り、遠近から來るお山登りの善男善女は、必ずこの莊で腰を休める。
- ▲正美浦 大して良い景色でないが、小じんまりしてゐる。金見ノ塔 優雅な建築で塗り

八月十日日夜七時から
マルトモホールにて
マンドリンと
舞踊の夕べ
主催 詩南社
後援 湯本マンドリン俱樂部

も宜い。雨に打たれぬやう大きな堂の中に藏つてゐる。▲片寄公園 奇麗な花苑がある。一年ばかり霜でやられたがもう大丈夫。詩南社はこの公園で知られてゐる。目下、盛んに植樹中である。▲田部村 住民は質朴でその耕地は將來有望視されてゐる。双葉樹 植田町寶徳院に在る。風變りなので目を引く。▲泉田橋 最近架設された橋新橋の二人連れが通る。▲白木温泉 山奥で骨折れるが可なり高温で湧出量が多い。ローカル分を多量に含有。萬病に妙なり。

編輯後記

▽海に山に詩心を培ふシーズン、更生詩南車の第二輯をおくり出す我々の歡びを、先づ、諸氏と共に分かちたい。

▽主として詩の方は片寄氏、短歌の方は白木氏が編輯の任に當つた。兩氏の努力を多量にしなければならぬ。

▽尚、短歌は一應高久氏が見てくれたが編輯の際に頁の關係から可なり嚴選した。諒として頂きたい。

▽丹野草笛「山二篇」は今の黒江露氏の舊稿であるが、これは同氏の原稿が到底間に合はないので同氏には無断で載せた。同氏の現在こんな詩を余り喜ばないだらうが、宥して頂きたい。

▽讀みものとして入れた六篇記事は先輯の漫談會よりも好評を受けたらう。

▽今輯は印刷所を新しくして、可なり良いコンヤシヨンの下に仕事が出来たことは有難い。

▽詩南社の經財的確立に就いては目下同

暑中御伺

詩南社

昭和七年三伏

人間で考案中であるが、現在の社友組織をもつと擴充したものになるだらう。之に關する社規も大体立案されてゐるから近く諸氏に諮つて御賛成を得たい。▽雜誌の體裁は當分こんな形で進むことになる。

◎消 息

吉田 甫氏(福島民友記者) 去六月福島民報社へ入社。平支局詰となる。

白木英尾氏 同十四日上京。廿四日歸平。

◎八月小集

一、時日 八月廿一日(日曜)午後一時
一、會場 平町四丁目 マルトモ食堂
一、會費 金貳拾錢(當日持参)

投稿者へ

- ▽投稿は詩及び短歌に限る。必ず原稿用紙へ楷書でつくり書くこと。
- ▽社友以外でも投稿は自由。住所姓名は明記されたい。歸上の匿名は可せず。
- ▽投稿の取捨は編輯者へ一任のこと。
- ▽運着の投稿は絶対に載せない。尚、原稿返戻には一切應じない。
- ▽送稿には必ず開封、三十文まで二錢。
- ▽「詩南車原稿」を表記すること。
- ▽宛名は添削其の他の便宜上、左記の中より一つを選んで送られたらう。

平町五丁目 片寄 耿二

平町田町 高久 晚霞

赤井村赤井 白木 英尾

◆次輯原稿締切 八月二十日

昭和七年七月十五日印刷
昭和七年七月二十日發行

福島縣平町銀治町二六

編輯兼發行人 宮田 誠吉

印刷所 平活版所

發行所 詩南社

頒價拾五錢(送料二錢)

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K • K A M A Y A

目 科 療 診

内 科、小 兒 科 婦 人 科
外 科、耳 鼻 咽 喉 科
皮 膚 病、花 柳 病 科
レ ン ト ゲ ン 科

院 長 醫 學 士 高 久 忠
副 院 長 新 潟 醫 學 士 赤 羽 清
藥 局 長 藥 劑 師 佐 竹 菊 雄
宅 診 午 前 • 往 診 午 後

平 町 田 町 六 十 四 番 地

高 久 病 院

電 話 五 一 三 番

三 猿 文 庫